

「日本人の美意識」

神様になった警察官——増田敬太郎

佐賀県唐津市、肥前町高串地区——

一見どこにでもありそうな、穏やかでのどかな漁村です。

この静かな集落が、1年のうちで最も盛り上がるのが、毎年7月に開催される増田神社の夏祭りです。ここは、地域の人々が篤く信仰する神社で、この時期になると、村中の人たちに笑顔があふれます。

夏祭り当日は、海上パレードや花火大会など、さまざまなイベントが行われますが、何と云っても、最大の目玉は子ども山笠です。愛らしさの中にもたくましい表情を覗かせる子どもたちに、見物人の視線は集まります。

しかし、それ以上に注目を集めるのが、その独特の山笠です。この集落に昔から伝わる山笠は、白馬にまたがって敬礼した警察官がモチーフとなっている全国に例を見ないものなのです。

これを子どもたちが曳いて、町内を練り歩きます。その姿を見て、町中の人々は興奮に包まれるのです。

なぜこのようにユニークな夏祭りが行われるようになったのかというと、この地の増田神社が、明治時代に赴任してきた増田敬太郎巡査を御祭神にしているからです。警察学校を卒業したばかりの敬太郎が高串の地に着任したのは、1895（明治28）年7月のことでした。

この年の春、日清戦争が終結し、衛生状態の悪い戦地から出征部隊が凱旋帰国すると、国内でたちまち伝染病が流行します。特に猛威をふるったのがコレラでした。

驚くべきことに、1895年の1年間で日本国内のコレラ死者数は4万人を超えていて、これは日清戦争の戦没者数をはるかに上回っています。

コレラの流行は、気温の上昇する7月にピークを迎えましたが、高串のような田舎には専門の医療機関もなく、村人たちは駐在巡査を頼りにするほかありませんでした。

ところが、高串の駐在巡査はもともと病気がちで、地域のために働きたいという気持ちはあっても、村人たちを助けるだけの体力がありません。

さらにこの地域の人々は、コレラに対していたずらに恐怖心を抱くばかりで、何ら有効的な知識を持っていませんでした。むしろ、コレラが伝染病であるということさえ知らないありさまだったので、被害は拡大する一方でした。

そこで、村人たちは県の警察本部に応援を求めたこととなりました。その要請に応じて着任したのが、新任の増田敬太郎巡査だったのです。

当時の高串は、まさに「陸の孤島」と呼ぶにふさわしく、唐津と高串を結ぶ山道は、馬がようやく通れる程度。敬太郎はこの道を一步一步踏みしめながら、まだ見ぬ村人のことを思い、正義感を奮い起こしたことでしよう。

このとき、敬太郎は25歳。通常3ヶ月かかる警察官教習課程を、わずか10日間で習得したという優秀さと、抜群の行動力を買われて、高串配属が決まったのです。

赴任先に到着した敬太郎は、さっそく地区の様子を調査して、区長たちとともにコレラ対策について協議しました。その上で、警察官としての権限をフルに活用し、高串の集落内を走り回って、覚えたてのコレラ対処法を実施していきました。

敬太郎は、コレラの広がりを防ぐために、まず患者の家をまわって消毒を行い、縄を張りめぐらして人々の往来を禁止しました。そして、村人たちに生水を飲んだり、生のまま魚介類を食べたりしないよう、指導して回ったのです。

彼が施したこれらの措置は、コレラ対策としてきわめて妥当なものだったと言えるでしょう。ところが、彼の懸命の努力とは裏腹に、すでに手遅れの患者が薬を飲んだ後、次々と亡くなってしまったのです。

その様子を見ていた村人たちの間に、「あー噂」が流れ始めます。

「増田巡査が毒薬を飲ませている……」
この根も葉もない噂は、あつという間に村中に広まっていきました。

すると今度は、治る見込みの高い患者までもが不信感を抱き、敬太郎に反発するようになっていきました。

「この薬は毒薬だから飲まない」
そう言って、投薬を拒否する患者が相次いだのです。

純粋に、「村人たちを助けたい」という思いで着任したにもかかわらず、その思いが空回りするような展開に、敬太郎はやるせない気持ちになったことでしよう。自分の善意が通じない無念さに対して、彼の胸中はどうなものであったのか、考えただけで切なくなってしまう。

けれども彼は、自暴自棄になることなく、村中を一軒一軒まわり、根気よく人々の誤解を解いていったのです。その努力が実つて、しだいに村人たちは、敬太郎の説明に耳を貸すようになりました。

ところが、一難去つてまた一難。村人たちはコレラが伝染病であることを理解すると、今度は自分に病気が染まることを恐れ、亡くなった人の遺体を運ぶことを拒むようになったのです。

敬太郎は、泣きたい思いだったでしょう。孤独感に襲われ、すべてを投げ出したいと思ったかもしれません。それでも、彼はたった一人で遺体を背負い、対岸の丘の上の墓地に埋葬しました。

患者への手厚い看病や予防活動に加え、遺体の埋葬まで……。

まさに、寝る間も惜しんで献身的に働き続けます。

このとき、敬太郎を支えていたのは、警察官としての自覚や責任感だったのか、それとも人としての優しさだったのでしょうか……。

驚嘆すべきことに、彼は高串に着任してたった3日間で、これだけのことをやってのけたのです。彼がどれほど村人のために尽くしたか、多くの言葉を費やさなくても、この一事によって十分に伝わってきますね。

25歳の敬太郎は、若くて体力があるから

ここまでできたのでしようし、村人のことを思うとき、彼は疲れているという感覚すら持たなかったことでしょう。

けれども、どんなに体力があろうとも、たとえ本人が疲れを感じていなかったとしても、この活動量は限界を超えています。極限状態の敬太郎の身体に、容赦なく襲いかかる魔の手が……。

そうです、コレラです。

彼はコレラに罹患した村人を看病したり、遺体を埋葬したりしているうちに、自分自身もコレラに冒されてしまったのです。

その翌日、敬太郎は帰らぬ人となりました。

警察官になって7日目、高串に来てわずか4日目。25歳、あまりにも若すぎる死に、村人たちは悲しみに暮れました。

死の間際、敬太郎は切れ切れの息の中で次のように言ったそうです。

「このような状態では、回復の見込みはないと覚悟しています。しかし、村のコレラは私が全部背負っていきますから安心してください。また、村人たちには私が指導したように、看病と予防をしつかりやるように伝えてください」

それは「村人を守りたい」という、彼が命を賭して吐き出した遺言でした。

自分の故郷でもないこの高串の地を心から愛し、村人のために尽くしてくれた若き巡査の死に際して、コレラが伝染することを恐れる村人はもういませんでした。敬太郎の遺体は村人たちの手によって、高串沖の小松島で火葬されたのです。

そして、不思議なことに、あれだけ猛威を振るったコレラは、敬太郎が亡くなってからというもの、高串地区ではパツパツと鳴りをひそめたということです。

やがて、再びこの地域に穏やかな日々が戻りました。

なぜ、高串でコレラが終息したのか、その理由を、私は次のように考えています。

村人たちがコレラに対して無知だったときは、適切な対策を講じることができず、どんどん被害が広がっていきました。その後、敬太郎が着任し、人々はきちんとした知識を得ましたが、それが逆に作用してし

まい、みんなが異常なほど恐怖を感じてしまいました。

どれだけ正しい知識を得たとしても、人々が怯え続ける限り、その知識を活用することなんてできません。恐れを手放し、愛に生きると決めたとき、知識は知恵に変わるのです。

たった4日間という短い時間でしたが、村人たちは敬太郎の愛に溢れた生きざまに触れました。その鮮やかな記憶が、人々の心に素食っていた恐怖心を雪のように溶かしたのではないのでしょうか。そして、恐怖を手放した村人たちの心に感謝の気持ちがあふれ上がり、愛の灯が点つた……。

どんな状況にあっても、感謝の思いや希望や勇気を持つことで、心を愛で満たすことができます。心が愛で満たされたとき、目の前の状況は一変するのではないのでしょうか。

敬太郎の遺言通り、コレラが終息したことに神秘の念を抱いた村人たちは、彼に心から感謝するとともに、その御霊を慰めなければならぬと考えました。

そこで、遺骨の一部を遺族から分けてもらい、高串の集落を見渡せる秋葉神社の境内の一角に埋葬し、そこに灯籠型の墓碑を建立しました。これが、現在の増田神社の起源地です。そして、夏祭りには今でも、彼を模した山笠が町中を練り歩くのです。

ちなみに、敬太郎が火葬された小松島には「警神火葬の碑」が建てられています。この碑も航海や漁の安全を護る神様として、地元で崇められているそうです。

神様になった増田敬太郎巡査——

私は彼の生き方に深く感動します。と同時に、たった4日間の恩を100年経っても忘れずに語り継ぐ村人たちもまた、たまらなく愛おしく感じます。

この物語は、増田神社が存続する限り、彼が愛した高串の地でいつまでも語り継がれていくことでしょう。

こ了解のうえ転載させていただきました。
日本人の知らない日本がある
こころに残る現代史 白駒妃登美 著

